

看護技術教育に関する検討 — 看護婦の実施状況と学生への期待調査から —

長瀬 初恵, 林 みつる, 宇野 恵子

A Study of Nursing Skill Education: Through a Survey of Nurses' Experience and their Expectation for Student Nurses

Hatsue NAGASE, Mitsuru HAYASHI and Keiko UNO

キーワード：看護教育, 看護技術, 臨地実習, 看護婦

概 要

本学第二看護科では、学生が臨地実習で学ぶべき看護技術項目を「臨地実習経験録」（以下「経験録」と略す）に示している。その項目が臨地実習の場で豊富に経験できるかどうか、および看護婦が学生時に経験させたいと考えている項目が経験録と一致しているかどうかを探る目的で臨地実習先の看護婦を対象に調査を行い、153名の有効回答を得た。この結果、経験録に「必ず経験する」と表示していても病棟であまり実施されていない項目があった。また看護婦が学生時に経験させたいと考えている項目は、観察技術に関する項目に高く、治療・処置に関する項目が低いことが明らかになった。

1. はじめに

学生は臨地実習の場で実践することにより状況を判断し、対象に合わせた看護技術を会得する。このため臨地で経験することの意義は大きい。そこで本学第二看護科23期生における臨地実習終了後の看護技術経験状況を調査し、その結果に基づいて24期生の経験率を高めるため、教員は病棟の状況に応じて経験できる項目や対象患者をアピールしたり、学生の経験録記入状況を見て個別に指導するなど動機づけを行った。しかし24期生の経験率は23期生に比べて向上が認められなかった。この原因として実習環境に問題はないか、実習先の看護婦の看護技術実施状況と看護婦が学生時に経験させたいと考えている技術項目について調査を行い、検討したので報告する。

2. 研究方法

1) 対 象

本学成人看護臨地実習施設であるK病院4病棟と3部署（腎センターなど）の看護婦175名。

2) 方 法

調査項目は学生が使用している「臨地実習経験録」の看護技術からの164項目に、文献¹⁾や院内検査手順マニュアル²⁾より選んだ39項目を加えて203項目とした。設定した203項目に対して①調査日前1ヵ月間でどのくらい実施したか（「毎日」「1/週以上」「1/月以上」「なし」の中から選択）②学生に卒業時までにぜひ経験させたいと思う項目（該当項目を選択）の2点について回答を求めた。実習病棟看護婦全員を調査対象とした（図1）。

3) 調査期間

1998年7月7日～1998年7月21日

3. 結 果

対象175名中、回答が得られたのは157名（89.7%）で、有効回答数は看護婦の看護技術実施状

（平成10年9月17日受理）

川崎医療短期大学 第二看護科

The Second Division, Department of Nursing,
Kawasaki College of Allied Health Professions

看護技術アンケート（1998年7月実施）

学生にぜひ経験させたい
 ✓項目に○印をつけて下さい、
 ここ1ヵ月の
 ✓あなたの実施頻度

学生	技術項目	毎日	1以上/週	1以上/月	なし	学生	技術項目	毎日	1以上/週	1以上/月
	観察						24 嚥下困難			
	1. 脈拍						25. 腹部膨満			
	2. 心拍						26. 食欲低下			
	3. 血圧						27. 発疹			
	4. 呼吸						28. 倦怠感			
	5. 体温						29. 疼痛			
	6. 尿量						30. 視力障害			
	7. 身長									

図1 看護婦への看護技術アンケート調査用紙

表1 学生が「必ず経験する」とした項目の看護婦の実施率別病棟差

(下線は実施率90%以上の病棟)

実施率	項目名	実施率70%以上の病棟	実施率50%以上70%未満の病棟
30%未満	術前オリエンテーション 摂取・消費エネルギーの算定 筋等尺・等張運動（自動・他動） 呼吸訓練法 三角巾	10W	11S 11S ICU
30%以上	A 感覚機能に障害のある患者とのコミュニケーション A 言語中枢機能に障害のある患者とのコミュニケーション B 生活指導 B 食事指導 B 薬物指導 入院時オリエンテーション 経管栄養 洗腸（グリセリン） 入浴・シャワー介助 義歯の取扱い 関節可動域訓練（自動・他動） 中心静脈圧測定 輸血 診察介助	腎センター 腎センター 11E, 10W <u>12W, 11S, 10W</u> 12W, 10W <u>12W</u> 12W, 10W 10W, ICU <u>11E, ICU</u> <u>11E</u> ICU	12W, 11S, ICU, 腎センター 11S, ICU 11E, 12W, 11S, 10W 11E, 12W, 11S, 11W 12W, 11S 11E, 12W, 11S 11E 11E 11E, 11S 11E, 12W 11S OP, ICU, 腎センター 11E, 11S, 10W

(注) 項目前の英字は学生が経験録上同じ英字記号がついている項目の中から1つは経験するとして示されているもの。

況については153名(87.4%)、看護婦が学生時に経験を希望する項目については145名(82.9%)であった。

学生の実習が1病棟3週間であることから、臨地での実施が1/週以上ある項目を看護婦の実施状況(以下「実施率」と略す)から90, 70, 50, 30%の5段階に分類した(図2(1)(2)(3))。実施率100%の技術項目はなく、最高は99%の血圧測定、体温測定であった。また最低は0%の心膜腔穿刺の介助であった。一方看護婦が学生に経験させたいとする項目の割合(以下「期待率」

と略す)は図2(1)(2)(3)の通りである。実施率90%以上の項目の期待率は全体では \bar{x} (平均)=78.8%($\sigma=7.4$)、同様に実施率70%以上90%未満では $\bar{x}=69.9%$ ($\sigma=10.8$)、実施率50%以上70%未満では $\bar{x}=61.3%$ ($\sigma=12.8$)、実施率30%以上50%未満では $\bar{x}=57.0%$ ($\sigma=11.6$)、実施率30%未満では $\bar{x}=37.8%$ ($\sigma=13.5$)であった。

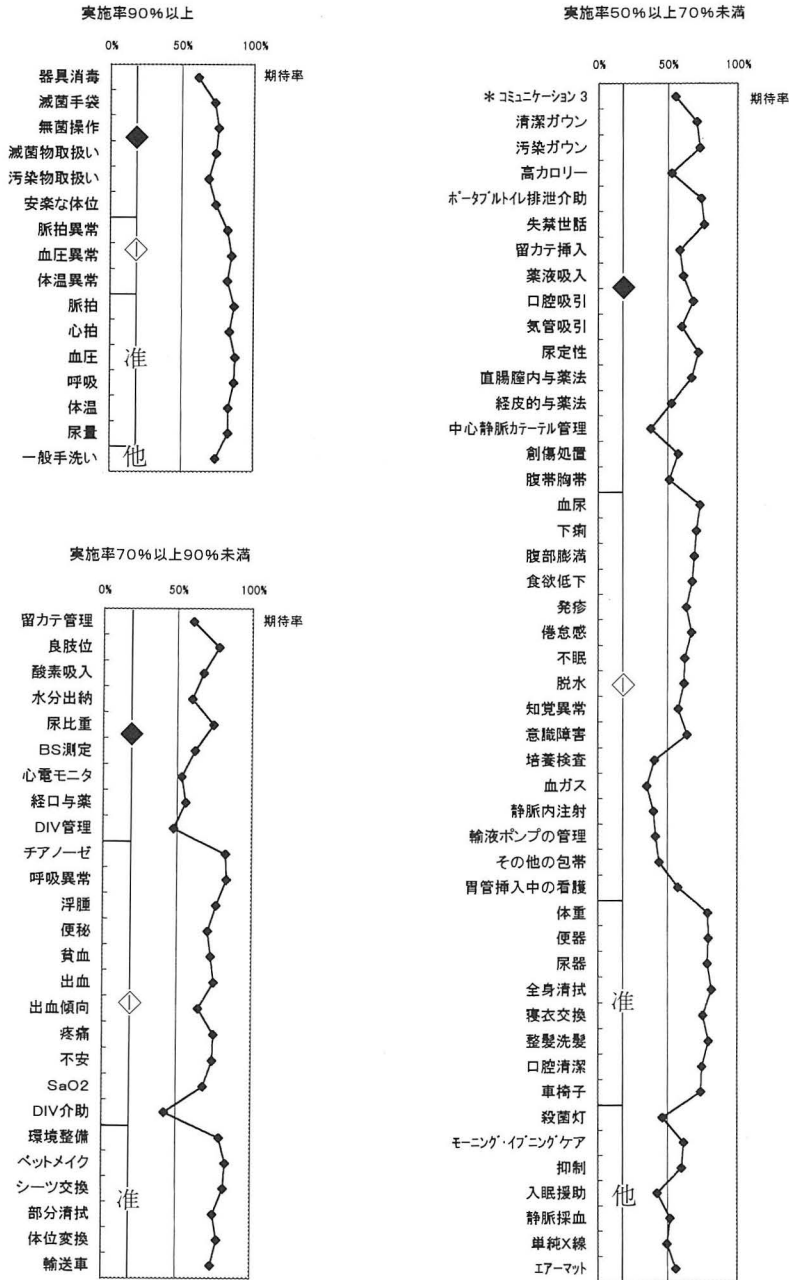
(1) 学生が「必ず経験する」とした項目について
 学生が「必ず経験する」とした項目は実施率90%以上では6項目、70%以上90%未満は9項目、50%以上70%未満16項目(図2(1)◆印)、30

表2 学生が「経験する」とした項目の看護婦の実施率別病棟差

(下線は実施率90%以上の病棟)

実施率	項目名	実施率70%以上の病棟	実施率50%以上70%未満の病棟		
30%	吐血	11 S, ICU	腎センター		
	下血				
	ショック				
	痙攣				
	集団指導				
	膀胱洗浄				
	洗腸 (石鹼, その他)				
	摘便				
	人工肛門患者の洗腸排便法				
	人工肛門周囲の皮膚のケアと装具の装着				
未	チルトテーブル	10W	10W 腎センター 11 E, ICU		
	装具装着中の看護				
	体位ドレナージ				
	気管カニューレ交換				
	救急蘇生 (気道確保, 人工呼吸, 心臓マッサージ)				
	試験紙による便潜血検査				
	血液型検査の実施と判定				
	C 気管支造影				
	C 上部消化管造影				
	C 注腸造影				
満	C 血管造影	12W 12W 11 S ICU 12W 12W	OP 11 E 11 S 11 S		
	C 脊髓造影				
	C 関節・椎間板造影				
	D 気管支内視鏡				
	D 胃・十二指腸内視鏡				
	D 大腸内視鏡				
	E 腎生検				
	E リンパ生検				
	E 筋, 神経生検				
	E 腰椎穿刺				
30%	E 胸腔穿刺	10W	11 E		
	E 腹腔穿刺				
	E 骨髄穿刺				
	E 心膜腔穿刺				
	自己血採血				
	剃毛, 除毛				
	前与薬実施時の看護				
	手術体位の固定と抑制				
	イレウス管挿入中の看護				
	S-Bチューブ挿入中の看護				
満	ギプス固定	10W	11 E, 11 S		
	牽引療法				
	死後の処置				
	嚥下困難			12W 腎センター	11 E, 11 S 11 E, 11 S 11 E, 11 S, ICU, 腎センター 11 S, ICU 11 S, 腎センター 11 E, 11 S, ICU, 腎センター
	視力障害				
	聴力障害				
	言語障害				
	黄疸				
	低血糖				
	導尿 (女性)				
導尿 (男性の介助)					
陰部洗浄					
杖歩行					
50%	気管内挿管の介助	12W 12W ICU 10W OP 11 S, ICU 11 S, ICU OP, ICU 11 S, ICU 11 S, ICU	OP OP 11 E, 12W 11 E		
	気管切開をしている患者の看護				
	人工呼吸器使用中の看護				
	観血的動脈圧測定				
	低圧持続吸引器使用中の看護				
	心電図 (十二誘導)				
	点眼, 点鼻, 点耳与薬法				
	皮内注射				
	皮下注射				
	筋肉内注射				
満	中心静脈カテーテル挿入の介助	11 E, 12W	腎センター OP, ICU 10 E, ICU ICU ICU		
	全身麻酔実施時の看護				
	腰椎麻酔実施時の看護				
	硬膜外麻酔実施時の看護				
	局所麻酔実施時の看護				
	ドレナージ中の看護				
	褥瘡ケアおよび処置				
	11 E, 11 S, ICU			11 S, 12W, 10W	

(注) 項目前の英字は学生が経験録上同じ英字記号がついている項目の中から1つは経験するとして示されているもの。



◆…経験録(必ず体験する項目)
 ◇…経験録
 准…経験録に示していない項目
 (准看教育において既習項目)
 他…経験録に示していない項目

* コミュニケーション……障害のある患者とのコミュニケーション
 コミュニケーション1…感覚機能に障害のある患者
 コミュニケーション2…言語中枢機能に障害のある患者
 コミュニケーション3…治療・処置のために意志伝達に障害のある患者

図2(1) 看護婦の実施率別学生への期待率

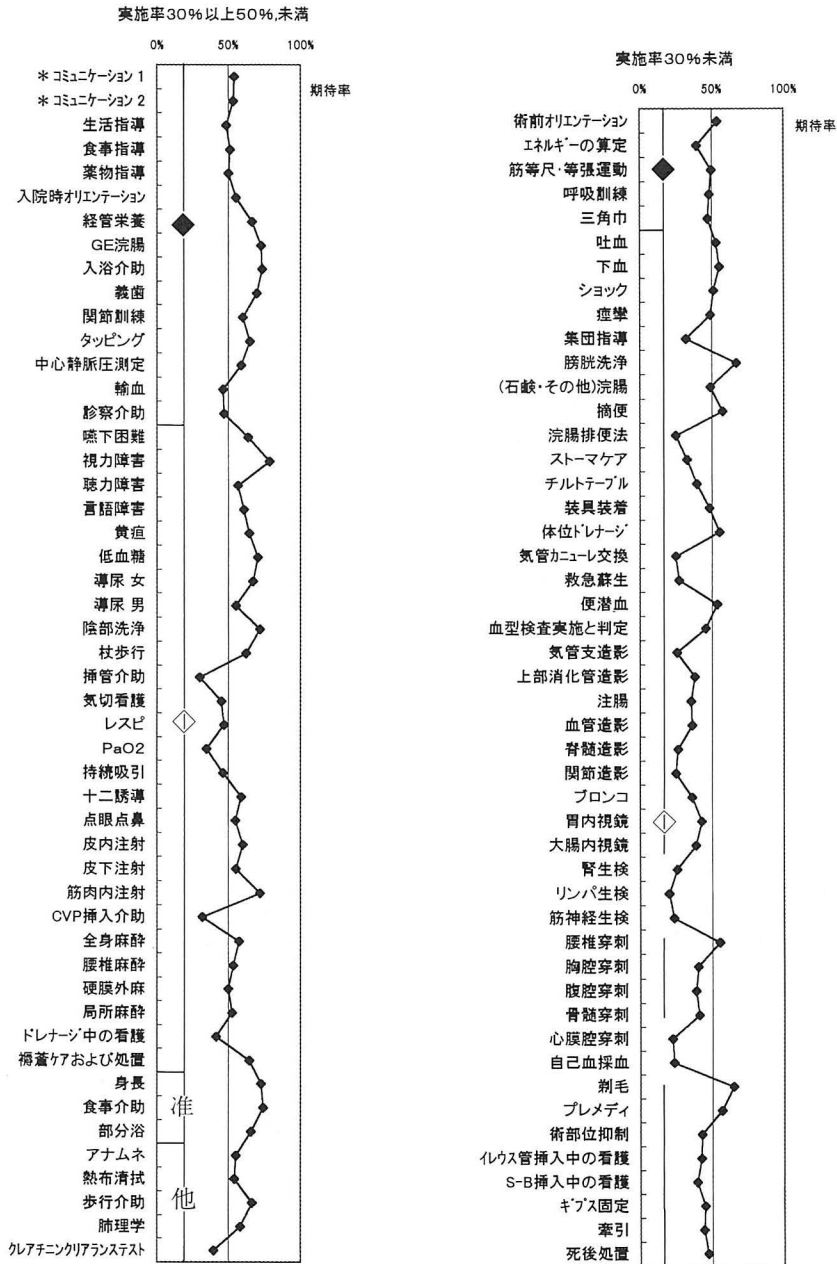


図 2(2) 看護婦の実施率別学生への期待率

%以上50%未満15項目, 30%未満は5項目 (図2(2)◆印)であった。実施率30%未満の5項目の中で実施率50%以上の病棟は0~1ヵ所であった(表1)。同様に実施率30%以上50%未満の15項目で実施率50%以上の病棟は2ヵ所以上あり, 中には90%以上の病棟もあった。

期待率についてはそのほとんどが50%以上70%未満であった(図2(1)(2)(3))。また期待率50%未満の項目は診察・治療に関する援助技術, 指導技術(呼吸訓練を含む), 摂取・消費エネルギー算定であった。

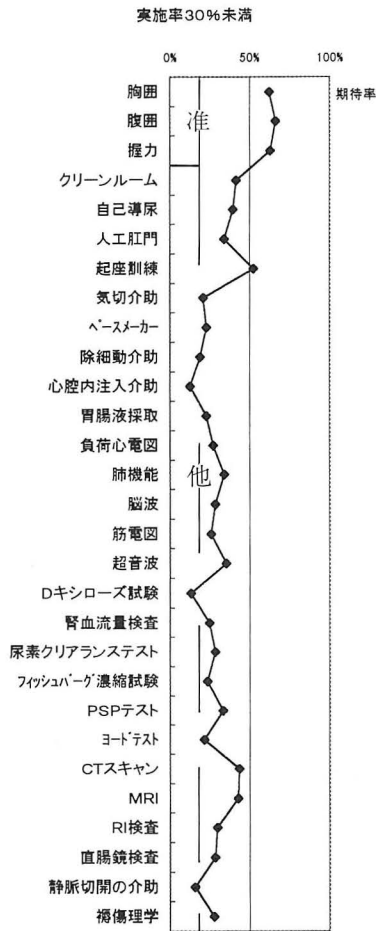


図 2(3) 看護婦の実施率別学生への期待率

(2) 学生が「経験する」とした項目について

学生が「経験する」とした項目では看護婦の実施率90%以上3項目、70%以上90%未満11項目、50%以上70%未満16項目(図2(1)◇印)30%以上50%未満27項目、30%未満43項目(図2(2)◇印)であった。また(1)と同様に看護婦の実施率が低い項目の病棟差については、実施率30%未満の43項目の中では試験紙による便潜血検査は実施率50%以上の病棟が6ヵ所あった(表2)。2項目に実施率90%以上の病棟、24項目に実施率50%未満の病棟があった。実施率30%以上50%未満では、全ての項目で実施率50%以上の病棟があった。

期待率については図2(1)より実施率50%以上でも点滴などの治療・処置に関する項目での期

待率は50%未満であり、実施率30%未満の項目でも期待率50%以上の項目は10項目あった。

(3) その他

准看護婦教育で習得する全26項目中、実施率は12項目が、期待率は22項目が70%以上とともに高かった(図2(1)准印)。

その他の項目で看護婦の実施率が最も高かったのは90%以上の一般の手洗いであった(図2(1)他印)。また病棟によってはクリーンルーム、自己導尿の指導、起座訓練、熱布清拭、歩行介助、肺理学療法、クレアチニンクリアランスが70%以上の実施率であった。

4. 考 察

総体的に看護婦の実施率の高い項目が期待率も高かった。実施率90%以上の項目では期待率 $\bar{x}=78.8\%$ ($\sigma=7.4$)とばらつきが少ないことから、看護婦の期待がほぼ一定であることがうかがえる。

教員が経験録で「必ず経験する」とした項目については看護婦の実施率、期待率ともに総体的には一致していた。実習環境として問題になるのは実施率が低い場合である。実施率30%未満の5項目のうち、摂取・消費エネルギー算定、筋等尺・等張運動は、看護婦は患者の状況や指導の必要性に応じて行うため低いが、学生には看護婦の実施状況に左右されず経験できる項目である。残りの3項目と実施率30%以上50%未満の項目については、同様に病棟によっては実施率が高い所があるため経験の場としては問題ないと考える。

学生が「経験する」とした項目は機会があればできるだけ経験することを目的に教員が選んだものである。この中では特に期待率が高いのは観察技術に関する項目である。教員は症状の観察は症例が限定されることも多く、また受け持ち患者によって観察方法が異なることから「必ず経験する」とまでは示していなかったが、看護婦の期待の高さから指導方法など検討を要する。実施率が低い項目では膀胱洗浄、剃毛、プレメディケーションといった診療の補助業務ながら医師とともに実施しない項目に期待率が高い。これは看護婦に委ねられている技術ほど確実性を求めていると考えられる。

また、准看護婦教育で習得すべき項目については看護婦の期待も高く教員と一致していた。その他の項目に対する看護婦の期待率は低かったが、中には起座訓練や歩行介助といった基本的な日常生活援助の項目もあり、経験録への提示の検討を要するものもあることがわかった。今後これら看護婦の実施状況や学生への期待も考慮して引き続き経験録の検討を行う必要がある。

5. ま と め

学生の臨地実習における看護技術の経験率は年々低下しているが、看護婦の実施状況から学生は経験できる環境にあることがわかった。また教員が学生に経験させたいとする項目は看護婦も同様に学生時に経験させたいと思っている。

つまり、教員・看護婦間の意識のずれは本調査ではみられなかった。今後は学生側の要因についても研究を進めたい。

今回の調査にご協力いただきましたK病院の看護婦の皆様に深く感謝いたします。

6. 文 献

- 1) 川島みどり編著：実践的看護マニュアル—共通技術編，第2版，東京：看護の科学社，1985.
- 2) 川崎医科大学附属病院看護業務委員会編：看護婦のための検査手順，第3版，岡山：川崎医科大学附属病院看護業務委員会，1991.
- 3) 奥宮暁子，他：臨床看護婦が期待する看護基礎技術の到達度と実習体験の可能性（第1報）—基礎技術一，第19回日本看護学会看護教育集録，28—30，1988.

